

《書評》

『AI・機械翻訳と英語学習：教育実践から見えてきた未来』

中山司*編、朝日出版社、2024年

近 藤 悠 介[†]

評者は、本書が紹介しているプロジェクト発信型英語プログラムに3年間携わっていた。現在は、編著者の中山氏と同様、私立大学で比較的規模の大きい英語教育プログラムの運営に携わっているので、互いに情報交換のためもあって連絡を取り合っている。そのような馴染みで今回この書評の依頼を頂いた。

本書は、まだ英語教育においてその功罪が明確になっておらず、評価が定まっていない機械翻訳および生成AIを大規模な英語教育プログラムに導入し、その成果を報告したものである。冒頭で機械翻訳、生成AIを導入した根拠が述べられ、次に報告があり、最後にこれらの技術が今後の英語教育に与える影響に関して展望が述べられている。機械翻訳、生成AIに懐疑的な英語教育関係者がいる一方、積極的な使用を支持する者がいる中で、大規模な英語教育プログラムにこれらの技術を積極的に導入した例はない。本書は、大学英語教育における挑戦の記録と評することができる。また、この挑戦は大学英語教育に新たな道筋を示していると評者は考える。これは単に技術の導入にとどまらず、英語教育における目標設定、学習スタイル、教員の役割、母語話者の意義など多くの面に影響を与えるものである。

プロジェクト発信型英語プログラムは、プロジェクトに基づく学習 (project-based learning) を取り入れたプログラムで、学生が自身の興味・関心に基づいてリサーチを行い、その内容を発展させて英語で発表（書き言葉、話し言葉で）するということを基本としている。まず、本プログラムの前提には以下のようなものがある（と評者は認識している）ことを読者と共有したい。

1. 学生には自ら発信したい何かがある。

プロジェクト発信型英語プログラムは、学生自らの興味・関心を他者と共有することから始めて、その発展としてさまざまなプロジェクトを遂行する。入学時から多岐にわたる内容を発信するが、振り返れば必ず個人が持つ素朴な興味・関心に通ずる道筋が見える。プロジェクト発信型英語プログラムは、学生が持つ個人の興味・関心を基に調べ、学生同士あるいは教員とアイディアを交換し、まとまったものを伝える方法を学ぶ場所である。この「自らの興味・関心を共有したい」という動機付けが、表現方法を身につけたいという動機付けにつながる。学生には、この「共有したい」と

* 立命館大学生命科学部教授

† 早稲田大学グローバルエデュケーションセンター准教授
yusukekondo@waseda.jp

いう動機付けがあるので、単位のために、高い評価を受けるためにという動機付けがあっても、機械翻訳や生成AIの出力を吟味せずにそのまま持ってくるようなことがなく、機械翻訳、生成AIが学生の表現力向上に役立つ。学生は自分のアイディアに責任を持っているのである。

2. 学生も教員も日々最善を尽くすが、それはその時の最善であり、最善は日々更新されるものである。

機械翻訳、生成AIがどの程度英語学習において有用か。また、これらを教育現場で利用することによる損失にはどういうものがあるか。これらは、教育という文脈の中で検証されなければならない。しかし、教育において、機械翻訳、生成AIが十分な信頼を得ることはないだろう。そうであるならば、これらの技術が信頼に足るものだと分かるまで、教育に用いることはできないのか。機械翻訳、生成AIを使用せずに身に付けるべき英語力は確かに存在する。一方で、機械翻訳、生成AIを英語学習に使用しないことで発生する損失もある。

プロジェクト発信型英語プログラムは、英語教育関係者の意見の一致を待たずして、機械翻訳、生成AIを導入した。利益も損失も学生と教員が一緒に考えてその時々の最善を見つけようという試みなのである。

本書はPART IからPART IIIの三部構成となっている。プロジェクト発信型英語プログラムの全体像をまず掴みたい読者はPART I第5章から読むことを勧める。このプログラムがどのような流れで、何を学生に身に付けてほしいのかが述べられている。第1章では機械翻訳、生成AIが英語教育にもたらす影響に関して、いくつか素朴な疑問に答える形で著者が自身の考えを述べている。第2章、第3章、第4章、第5章においては、それぞれの著者が、これまでの教育実践あるいは研究に基づき、機械翻訳、生成AIが英語教育へ与える影響について述べている。PART Iにおいて本書の基本コンセプトが述べられていて、これらを読むことで、プロジェクト発信型英語プログラムの教員が何を考え、何をしてきたかが理解できる。

PART IIは、機械翻訳、生成AIを使用した実践例が報告されている。ここに報告されている教育実践はまだ始まったばかりであり、今後ノウハウが積み重なるべきものである。著者らはこの実践を通して大学英語教育の次の段階を見通している。教員は「少し先」を見通せなければならない。PART IIIでは機械翻訳、生成AIの今後の発展を予想して、英語教育の未来について著者が自身の考えを述べている。ここで今後の英語のテストについて述べられているが、このように大局的に英語のテストについて、英語教育関係者がテストに関する自身の考えを述べているものを評者は知らない。

ほぼ完璧と言えるような機械翻訳があり、英語学習についていかなる質問にもかなり正確な回答をする生成AIがあれば、英語教師はもう必要ないという考えがあっても不思議ではない。「AIの登場によって必要とされなくなる職業ランキング」の上位に語学教師が位置付けられていたことがあった。AIの登場によって「怠惰な」語学教師は必要とされなくなるだろう。だが、AIの登場によって、語学教師ではなく、表現を教える者の必要性はより明確になったと評者は思う。